

横田利宏さん | 建具職人

一流の目を養い、唯一無二を生む―

職人・横田利宏の生き様

一流の仕事をこの目で見たい― 単身東京へ向かった若き日の横田利宏さん。名工たちの教えを受け、地元・越前市で唯一無二を生み出し続けた軌跡と培った審美眼が導く「美しい生活」とは何か…。貫いた哲学に迫ります。

「一流の仕事を見たい」 東京で出会った師の教え

横田利宏さんは昭和17年、武生市（現在の越前市）で建具屋を営む家庭に生まれました。当時、職人の世界では小学校を卒業するとすぐに丁稚奉公に出る子どもが多く、中学を出てさらに高校へ進学するのは一般的ではなかった。横田さんもまた、家業を継ぐことを期待されていたが、もともと建具屋の仕事に強い関心を抱いていたわけではなかった。それでも、どうしても高校へ進学したいと親に懇願し、ようやく許されたという。

高校時代は、授業を終えて帰宅すると家業の手伝いに追われる日々。休む間もない毎日の中で、唯一の楽しみは『木工界』や『芸術新潮』などの雑誌を読むことだった。そうした中で、日本初のデザイン学校「桑原デザイン研究所」の記事に目を留める。「ここなら学んでみたい」と心を躍らせ、入所を希望したものの、ちょうどその頃に発生した地震で家が火災に遭い、計画を断念せざるを得なかった。

夢を絶たれ、道を見失いかけた横田さんだったが、「それでも一流の仕事をこの目で見てみたい」という思いを捨てることはなかった。単身東京へ向かい、雑誌を頼りに会いたい人物をリストアップし、訪ね歩いた。

その中の一人、東京大学の山根有三名誉教授は横田さんに大きな影響を与えた。日本の美術史学者としても名高い山根先生は「何をするにしても目を養いなさい」と、横田さんに数々の美術館や工房を訪れるようすすめ、特別に美術館を巡るためのカードを貸してくれたという。技術だけでなく芸術的な視点も学び、美的感覚を養うことの重要性を強く認識するようになった。

そんな折、「横田くんにもってこいの人がいるよ」と紹介されたのが、指物師の佐藤重雄氏だった。卓越した技能者に与えられる「現代の名工」にも選ばれた佐藤氏のもとには、全国から弟子志願の職人が訪れていた。「弟子はとらんよ」とそっけ



なくあしらうことで知られていたが、それでも横田さんは何度も足を運び、次第に佐藤氏からものづくりの要となる部分を教わるようになった。「まずは道具だよ。手では何もできない、道具が仕事をするんだから」そう語る佐藤氏は、決して自らの仕事を人に見せることはなかったが、優れた道具の選び方や注文の仕方、使い方については熱心に指導してくれた。さらに、佐藤氏が横田さんに投げかけた言葉の中でも、特に印象的だったのは「これから職人だけでは生きていられないよ、少し美術の方へ走らないとね」というものだった。この言葉は、後に横田さんが独自のデザインを追求する上で、大きな指針となった。

期待と想像の上を行く仕事で 唯一無二の建具職人に



東京での経験を経て地元に戻り、父の建具屋を継ぐことになった横田さん。しかし、当時の売上は決して多くなく、依頼がくるのは修理の仕事ばかりだった。このままではいけないと感じた横田さんは、住宅を手がける大工だけでなく、設計事務所とも仕事をするようになっていった。

「当初は、設計事務所に行って名刺を出しても『建具屋なんてどこに頼んでも同じでしょ』という感じでした」と横田さん。しかし、設計者から言われたものをただ作るのではなく、「設計事務所を驚かせてやろう」と期待を超えるデザインやクオリティを提案することで、絶大な信頼を得ていった。「鍵の設置ひとつにしても、ちょっと昔の和のデザインや仕組みを取り入れて再現したりね。考えるのが好きなんです」横田さんが考えた建具のアイデアは雑誌にも掲載され、それを見た読者が設計事務所に依頼する。次第に「横田さん、何月なら暇なんだ?」と設計事務所側も横田さんの仕事の工程を考慮するようになった。単なる職人ではなく、設計と一体となって新たな価値を生み出す存在となったのである。

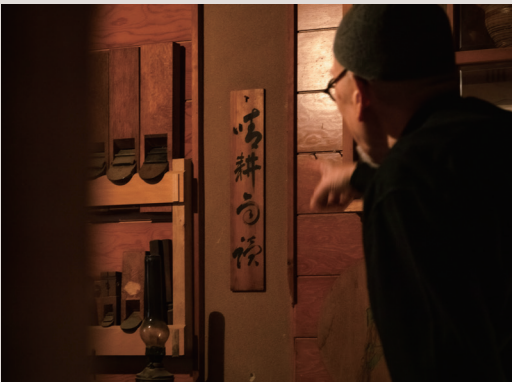
自身のものづくりを問う 生活の「間」を考えたデザイン

昭和の時代、大量生産・大量消費がもてはやされる中で、横田さんはそうした生活



様式に疑問を抱くようになった。「自分が作ったものも、もしかすると邪魔な存在なのかもしれない」という思いがよぎることもあった。

そんな折に誕生したのが、横田さんの代表作の一つ「Bo几（ボッキ）」である。金沢にオープンする新しいショールームのためにINAXから依頼を受けて制作した、伸縮自在な蛇腹式のテーブルだ。生活の中の「邪魔なもの」を「間」ととらえ、普段は折りたたんでコンパクトに収納し、必要な時だけ



広げられる仕組みになっている。使わない時は80cmほどに収まり、広げると最大2.6mまで拡張可能だ。

このデザインは、横田さんらしい遊び心と実用性が融合したものだった。「まるで使う時だけ大きくなるおちんちんのようだ」と冗談めかして語るが、そこには職人としての緻密な技術が随所に生かされている。桐の木枠に撥水加工を施した手漉き和紙を貼り合わせる構造は、提灯や唐傘から着想を得たもので、R字やS字に自在に変形できる。

さらに、テーブルの内部には電球が仕込まれ、蛇腹の和紙を通して柔らかな光が空間を包み込む。伝統技術を活かしながらも、現代の生活に調和するデザイン性を備えたこの作品は、まさに佐藤氏の言葉である「職人だけでは生きていけない、美術の方へ走らないと」を体現したものだった。

「お客様の喜ぶものを作る」 職人の矜持を支えるものとは

公募美術団体「三軌会」では文部大臣賞を受賞したほか、グッドデザイン賞や県デザインウェーブで大賞を受賞するなど、数々の功績を残した横田さんは、64歳で職人を引退した。

これまでの職人人生を振り返ると、「重要なのは『横のつながり』だ」と語る。異なる職種の職人たちと交流し、刺激を受けることで、自身の視野を広げることができるからだ。例えば、越前市の銀細工職人・竹万氏も、横田さんが刺激を受けた職人の一人だ。ある時、自身の家具に銀の引手を付けてもらおうと竹万氏に依頼した横田さん。銀の引手はひとつ5万円。その仕上がりに感銘を受けたが、「まだ磨きが足らん」と竹万氏は研炭でさらに磨き上げたという。「竹万さんは『研炭で磨くから角がきちんと出るんだ。サンドペーパーで磨いたらこの商品に5万円ももらえん』と言ってたんです。お客さんが喜び、驚くものを作れなければ、お金を払ってもらえない。それは面白くない落語を聞かされるようなものだからね」と横田さん。自らの腕を磨くのはもちろんのこと、目を養い、周囲とつながり、視野を広げながら、「お客さんが喜ぶものを作る」。まさに職人としての大切なことがすべてここに凝縮されているのだろう。

長年培ってきた審美眼で 美しい生活を作り続ける

現在も越前市内で暮らす横田さん。自宅を訪れると、丁寧に使い込まれた家具や調度品が並ぶ。どれも年季が入ったものだが、不思議と古さを感じさせず、品格すら漂う。客人が訪れると自らが作ったお盆に季節の葉っぱをあしらい、お茶を出す。その姿はまるで茶室の主人のようにしなやかだ。「美しく生活していきたい。目のなかに入ってくるものはすべて美しいものでありたい」と横田さんは言う。長年、職人として磨いてきた審美眼は、仕事だけでなく日常にも生き続けている。その姿は、ものづくりに生きた一人の職人の哲学そのものだ。唯一無二の建具職人が何十年もかけて築いてきた生き様は、未来のものづくりを志す職人たちにも受け継がれ、新たな創造の礎となっていく。



横田利宏さん TOSHIHIRO YOKOTA | 建具職人

越前市在住。建具職人。デザイナーAi Miki氏の叔父であり、建具からプロダクトまで様々なものづくりに従事。また、十五人の匠たちの本音のインタビューと、黒川紀章他のエッセーをまとめ、今も息づく日本各地の伝統技芸を探った「職人―伝えたい日本の"魂"」に建具職人として掲載。他に、季刊「Iichiko No.50-51」など掲載多数